

Petavatthu-Atthakathā について

藤 本 晃

南伝パーリ三蔵の Khuddakanikāya (小部) に収められる *Petavatthu* (餓鬼事経, Pv) は B. C. 3C. まだに編纂された經典で、様々な餓鬼 (peta) に関する五十一の物語 (vatthu) から成り、全編が偈 (gāthā) の形式で説かれている。一つの物語を構成する偈の数はわずか三偈のものから九十偈に達するものまで様々で、数偈から成る短編のものには餓鬼の話を全く含まずただ世尊の偈だけを説くものがあり、一方長編のものには、偈の途中で何の説明もなく物語りの場面や問答する説者たちが変わっているものがあり、その場合には偈の中に幾分の補足説明を含むものもあるが偈を読誦するだけでは意味が通じ難いものが多い。比丘たちが在家信者のために Pv を説く場合には、恐らくそれらの偈が説かれるに至った因縁譚や物語の背景などを比丘たち自ら補いながら、偈を読誦していたであろうと想像される。

A. D. 6C. 後半にダンマパーラ (Dhammapāla) は

それ (Pv) に対して、古の注釈書の仕方に則り、一つ一つ [の物語] にそれぞれ由縁を明らかにし、大寺派の、極めて明瞭で純正で、微妙な意味内容が決定している宗義に違ふことなく、力の限り明瞭に、[物語の] 意味内容に対する註釈を私は作る。私はしっかりとそれを説きますので、善き人々はどうぞお聴き下さいますように。¹⁾

と、それまで伝えられてきた伝統に則って Pv に註を施し *Petavatthu-Atthakathā* (餓鬼事経註, PvA) を著した。これによって Pv に説かれる偈の内容や背景が容易に理解できるようになった。PvA は Pv の物語に一つ一つ因縁譚を説いて偈の説者、説かれた場所、時、由来を明らかにし、幾つかの偈の後にまとめて偈文の語義解釈をし、註釈を加える。偈の説者や場面が変わる処では、それ以降の因縁譚を挿入する。最後に偈の説者が世尊以外の場合には、世尊にその事件が報告されたとして「師はそ [の事件] を縁として説法された」などという結語で締めくくる。世尊が偈の説者となっている物語は全体の四分の一の十三話に過ぎないが、ダンマパーラは Pv に収められる偈は全て伝説であると主張しているのである。Pv はこれまで

餓鬼の惨憺たる姿を述べている。(中略) 来世における結果を前世の行為と厳密に対応させ、因果応報の理を Schema 的に表現している。そのため物語は千篇一律で迫力に乏しい。又他方では亡者救済のために僧伽へ布施することの功德が強調されている。²⁾

等と簡単に評されることが多く、実際 Pv の全五十一話中三十七話に餓鬼たちの悲惨な現状とその果報を受けるに至った前世の悪業が説かれ、悪因苦果の因果法則が強調されている。しかし Pv に説かれる思想はそれに留まらない。ダンマパーラが

餓鬼たちによって前生において為された餓鬼という状態を作り出す業と、彼らのそれぞれの [餓鬼としての] 果報の違いを一つ一つ明確に示し、[人々に出世間への] ぐずぐずしていられない気持ちを生じさせ、業の果報を明らかに示す諸仏の教説がある。³⁾

と PvA に説くように、この教説を説き聞かせられた人々は、自分自身の来世の楽果のため、また現に苦果に苦しむ餓鬼たちのために、自ら悪業を離れ善業を行い世間の功德を積み、自身の帰依処と餓鬼たちの救いを求め、更には出世間の志を立てたことであろう。Pv (A) の物語には単に餓鬼たちの悲惨な姿を説くだけでなく、それを通して人々を善行や出世間へ導く重要な思想が随所に織り込まれている。ここでは第一品第一話 (以下、I.1) に説かれる布施の物語を中心にして、Pv (A) が示す思想の一端を概観する。

因縁譚：生涯善行を全く行わなかった放蕩な長者の息子が没落し、盗みを働いて捕まり、斬首刑に決った。処刑場まで歩かされる道中、知り合いの女性が彼を哀れに思い、彼に水と砂糖菓子を与えた。マハーモッガラーナ長老は天眼通によってこの様子を知り「彼は何の善行も行わず、悪行ばかりした。次には地獄に生まれるであろう。しかしもし彼がもらった水と砂糖菓子を私に布施すれば、その善行によって彼は地の神に生まれ変わるであろう」と考え、神足通によって彼の前に現れた。長者の息子は長老を見て敬虔な気持ちになり「今処刑されようとしている私がこの水や菓子を食すことに何の意味があるのか。しかし彼岸への道を進む人 (長老) にはこれは行路の食となるだろう」と考え、水と砂糖菓子を長老に布施した。長老は布施を受けてその場に座り、水と菓子を食し、座より立って去った。

長者の息子は処刑された。長老への布施の善行によって三十三天に生まれる価値があったが、死ぬ直前に「彼女のお蔭で施物が得られた」と彼女に愛着を持ち心が汚れたので、バンヤンの木の精 (地居神の一つ) になった。この因縁により、世尊は以下の三偈を説いた。

1: アラカンたちは田の如し。施主たちは農夫の如し。施物は種子の如し。これより果報が生じる。

2: この種子, 耕作, 田は, 餓鬼たちのためでもあり, 施主のためでもある. それ (布施の果報) を餓鬼たちは享受し, 施主は [布施の] 功德によって栄える.

3: ここにおいて善を為し, 餓鬼たちにと供養 [し], 勝れた行いを為した後, 彼 (施主) は天界の処に赴く.⁴⁾

Pv (A) の最初の物語であるにも関わらず, I.1 には前世の悪業の故に苦しむ餓鬼は出ない. 因縁譚は, 悪業の故に地獄に墮ちる筈であった男がマハーモツガラーナ長老へのたった一つの善行, 布施によって三十三天に生まれる価値があったと説き, 続く世尊の三偈は布施と回向の思想を示す. その中, 第一偈では布施が果報を生じるために必要な三つの要素, 即ち布施の受け手, 施主, 施物を挙げ, 受け手であるアラカンを良田に, 施主である在家信者を農夫に, 施物を種子に喩える. PvA は

ちょうど雑草などの悪い条件が取り除かれて善く整備された田が, 種子が撒かれ, しかるべき時に水などの必要条件がそこに与えられるなら農夫に大きな果報をもたらすように, 貪欲などの汚れを取り除き, [自己を] 善く整えている煩惱が尽きた相続 [であるアラカン] は, 施物という種子が撒かれた時に適時 [に与えられる] などの必要条件がそこに満たされているなら, 施主に大きな果報をもたらす.⁵⁾

と註釈する. 良田であるアラカンに対して, 農夫が耕し種子を撒くように心を込めて布施するなら, 施物という種子は果報をもたらすのである.⁶⁾

第二第三偈は, アラカンへの布施が施主自身に生天などの果報をもたらすだけでなく, 餓鬼もまたそれを享受すると説く. ここには餓鬼への功德の回向が示唆されているが, PvA はこれを以下のように註釈する.

もし施主が餓鬼たちのために (uddissa) 布施をするならば, 餓鬼たちにとっても施主にとっても, 一方, 餓鬼たちのためにではなく, 布施をするならば, 施主にとってだけ, この種子, この耕作, この田は利益となるという意味である. (中略) 施主によって餓鬼たちのためにと布施がなされる時は, 前述の如く, 田と耕作と種子 [の三者] が円満するので, そして [餓鬼たちがそれを] 感謝する (anumodana) ので, 餓鬼たちにとって利益となるようなその布施の果報を, 「餓鬼たちは享受する」. (中略) 一方施主は, 自分の布施からなる功德の故に天 [界] や人 [界] において [その功德が] 円満するのを享受するなど, 功德の果報によって栄える.⁷⁾

三つの要素が整い正しく行われた布施は, 施主自身には現世の幸せや来世の生天などの果報をもたらす. 更に, その布施が餓鬼たちのために行われたなら, 即ち餓鬼たちに回向されたなら, 施主自身だけでなく餓鬼たちもまた, その布施の果報を享受することができる. 更にダンマパーラは第三偈の「餓鬼たちにと供養」

を釈し、

餓鬼たちのために [為された] 布施によって [アラカンたちを] 接待し、受けている苦悩から餓鬼たちを解放して、実に彼らのためにと与えられている布施が、彼らのための供養 (pūjā) と呼ばれる。⁸⁾

とする。ここでは餓鬼たちのために回向する布施を特に供養と呼ぶのである。

以上 I.1 に説かれる布施の思想を概観し、それが回向、供養等と密接に結びつくことを見てきた。これらの思想は比丘の出世間の修行に対する在家信者の世間における福德行 (いわゆる施論、戒論、生天論等) としてよく知られるものであるが、その由来や解釈は現在も様々に議論されているところである。⁹⁾ 次回は PvA の十九話に亘って説かれる布施の思想を取り上げ、この問題の解決に一石を投げたい。

1) Hardy, E. ed., *Dhammapāla's Paramattha-Dīpanī part III being the Commentary on the Peta-vatthu* (以下 PvA と略す) (PTS, 1894), p.1. 帰敬偈第 8-10.

2) 前田恵学『原始仏教聖典の成立史研究』(山喜房仏書林, 1964, rpt.1990) p.760.

3) PvA, p.1. 帰敬偈第 5-6.

4) PvA, pp.3-7 取意.

5) PvA, p.7, ll.11-16.

6) この後にダンマパーラは、布施される事物は喜捨する意志 (cetanā) によって準備されるので施物と呼ばれ、施物という事物を対象とする喜捨する意志にこそ種子という性質があると説く (PvA, p.8, ll.2-9 取意)。施物という物自体ではなく、施物を布施する施主の意志こそが果報をもたらすと強調するのである。

7) PvA, p.8, ll.13-24.

8) PvA, p.8, ll.30-33.

9) 例えば、袴谷憲昭「悪業払拭の儀式関連經典雑考 (VII)」『駒沢短期大学研究紀要』25 (1997), pp.107-32 は、p.115 以降に本論文でも引用した Pv I.1 を新たに翻訳、解釈している。

〈キーワード〉 餓鬼, 布施, 回向, 供養

(広島大学大学院)